単調なはた織りの調べが、あちこちの家から流れ続けてきた。

会津木綿といえば青木木綿といわれるほどに、青木地区産の木綿織は色、縞模様、風合いが見事である。農家の作業着に欠かせなかった青木木綿は、今、会津を代表する民芸織物として蘇った。

会津地方で生産される綿織物で、会津坂下町産のものは青木木綿（青木縞）と呼ばれている。青木付近は昔から藍の栽培が盛んではた屋が軒を並べていたという。

江戸時代初期からの伝統があり、藩主保科正之が綿花の栽培を奨励したと伝えられている。そのため原料の綿は、昔は、どの農家でも自家用として栽培していた。明治に入ると輸入綿花の登場で次第に自家用栽培は減少し、大正初期に入ると綿栽培は一時ほとんど姿を消した。

その後、太平洋戦争が勃発し戦争下での生活が長期化してくるにしたがって衣料品は不足し再び綿の栽培が始まった。終戦後も物不足の厳しい世相の折、綿の製糸とはた織はしばらくの間つづいた。

製糸作業のひとつに「綿切り」といわれる作業があった。摘んできた綿の核と繊維を分ける仕事で、どこの家でもおばあちゃんの役割りだった。忙しい農家の仕事の後にするので、仕事は夜わりまで続くことも珍しくなく、「向いの山に雪（綿）がふる、手前の山にあられ（種）ふる」と歌い、睡気と戦いながら作業は続けられた。

一方、藍の栽培も古くから行われ、

青木木綿